Music

閉ざされた村から生まれた、ナチュラルなロック ジェシー・コリン・ヤングの『get together』

Text: George Cockle
文／ジョージ・カックル

今回はいくつかのサーフポイントを抱える、カリフォルニアのボリーナスという小さな村で生まれた音楽だ。機会があればその村に足を運んでほしいから、まずは行き方を説明したい。サンフランシスコからハイウェイ101を北に向かって、ゴールデンゲートブリッジを渡ると、そこはマリンカウンティー郡だ。さらにレインボウが描かれたトンネルをくぐり、下り坂を降りると西へ向かう海岸線のハイウェイ1がある。その先にはいくつかのサーフポイントも点在している。有名なミュアービーチとスティンソンビーチというポイントから少し北に走ると、ひなたぼっこをしている大きなアザラシがいるボリーナス・ラグーンが左に見える。ボリーナスはそれを越えて西へ向かうと、行き止まりにある大きな米杉の森に囲まれた小さな村だ。

そこには野生の動物がたくさん生息している。鹿、アライグマ、狐、アカシカ、スカンク、なんとアメリカンパンサーもいる。しかし町に向かう道路に案内板は出ていない。役所が看板を立てると、住人達が外してしまう。まるで外の人には来てほしくないかのようだ。その看板を外すのが今は若者の遊びになっているという。だが実際に村へ行ってみると、カフェやレストラン、雑貨屋もある。もちろんコンビニはなく、60年代のヒッピー文化が今もそのまま生きている。だからなのだろうか、村の人々はやさしい。外部の者にも全然、冷たくない。看板を頼らずに村までたどり着いた人を歓迎しているのかもしれない。時々サーフショップも見かけるが、俺の経験では一年後にはクローズしている感じだ。

この村にもボリーナス河口とボリーナス・ビーチというメローなポイントがある。その村から行き止まりの泥道を使って、もっと海岸沿いを北に行くとバードサンクチュアリがあり、その中にはシークレットのリーフが点在する。道路は海添いを走っているが、崖の上なので、ポイントは一つも見えない。その道沿いに泥の駐車場があれば、その下にきっとポイントがある。崖の下まで行くと裸でひなたぼっこをしている男女のサーファーにもよく出会う。このボリーナスに住む人々は、基本的に自由奔放なボヘミアン達だ。その中にはアーティスト、学者、ヒッピーもいるが、サンフランシスコで働いて、毎日1時間の車通勤をする人もいる。そして、その中にもサーファーがいる。しかしこの町のサーファー達は、波を追いかけて旅に出ることはあまりないし、サーフファッションも関係ない。ボードと黒いウェットがあれば十分な、ソウルサーファー達だ。海では目だけで挨拶し、静かにサーフィンをする。まるで、禅サーフィンのようだ。

ボリーナスには何人かのアーティストが住んでいるが、きっと一番有名なのは元ヤングブラッズというバンドのボーカリスト、ジェシー・コリン・ヤングだろう。彼はそのバンドで60〜70年代にヒットを出したあと、ソロ活動を始めると同時に、ロック界から逃げ出すためにボリーナスに引っ越してきた。彼はこの時間が止まっているかのようなこの村で音楽を作っている。最も知られている曲は、彼の作曲ではないが、「ゲット・トゥゲザー（get together）」だ。この曲はみんな仲良く生きていこうと歌っている。声といい、音といい、自然の中で暮らす人々の生き方が伝わって来る。

"Smile on your brother
and get together right now♬"

ジョージ・カックル●60〜70年代のロックに精通し、ラジオ・パーソナリティとしてインターFMや東京FMで活躍中。鎌倉出身・在住。波乗り歴40年の親父サーファー。
www.whatsupmusicinc.com

©George Cockle / On The Board